

牧師室から (2020.12.20)

今年も残すところ 10 日程となり、この『牧師室から』の私の執筆はこれが今年の最後となるので、今回は鈴木家のクリスマス及び年末の過ごし方、ルーティーンについて書かせて頂くこととする。

まずクリスマスだが、この時期には『クリスマス・オラトリオ』の CD を聴くことにしている（実はこの時期にしか聴いていない）。そこでは、始めと終わりのコーラルに受難の「血潮したたる」が使われており、特に最後が、この荘重な旋律が軽やかに施されて締めくくられているのが心憎い。十字架に裏付けられたクリスマスの喜びのメッセージがバッハの信仰と共に感じられる。とは言え私の好みでいえば、バッハのオラトリオや受難曲のうちではアルトのアリアが感銘深いと思う（私の友人とも感想が一致したこともあるので、他にも共感される方はいるのではないかと思う）。

さて大晦日だが、この日はちょっと洒落て、まずウィーン風に『こうもり』を DVD で鑑賞する。そして楽しい気分になったら、今度は気持を日本に変えて、そば打ちをする。初めの頃は、部屋中粉だらけにして、妻が悲鳴を上げ、叱責されたが、最近は粉も飛ばさなくなったので文句は言われなくなった。当初の出来栄はまるで蕎麦掻きの様であったが、年を重ねるごとに少しずつではあるが細長くなって麺らしくなっている。ところが、このことを聞いたある旧約の泰斗の先生からは「鈴木君、そば打ちなんでものは隠退して、老後にやるものだよ」とのお言葉を頂いた。確かに、そばを打つ代わりにスーパーで調達して、その節約した時間にヘブル語の単語を一つ、二つでも覚えたいほうが、牧師としては有益であるに違いない。が、分かっているけどやめられないのが悲しい性分である。

今年はコロナ禍にあって、異例の年末を迎える方もおられるかもしれないが、インマヌエルのお守りのうちに過ごせるようにと思っている。来年、希望を持って新しい歩みができますように。

「変えられぬことを忘れる人は、幸いである」（『こうもり』より）

（鈴木淳一牧師）